

翌朝目が覚めると、天気は昨日とは違って変って快晴だった。緑の湿原が朝日を浴びて輝いている。抜けるような青空を背景に、輝く雪山が頂上までくっきりとその姿を現していた。

「うわああ〜!!」

思わず子供の様に外に走り出ると、少しでも山が大きく近くに見えるところに行こうと、盆地状になっている湿原を横切り、湿原を縁取る山の斜面を駆け上がった。

昨日の少年達の小屋はこの斜面に立てられており、そばを走り抜けると小屋の中から少年が顔を出し、何か叫びながら手を振っている。

昨日はあれから私達のテントにも少年達が訪ねてきて、牛番小屋では不在だった旅仲間の男性陣や烏里氏も含め、しばらく話をしてすっかり仲良くなっていた。彼らと知り合ったことで、雨に降り込められた亜丁の第一日目もどうやら楽しく過ごすことが出来たのだ。

「おっはよう〜!!」

叫び返しながらも雪山の景色に夢中になっていた私は、足を止めずに山に向かって斜面を駆け上がり続けた。富士山の頂上に匹敵する標高のこの土地では、下界の人間である私が走り回ればかなり息がきれたが、数日前までは歩くだけでも頭痛がしていたのだ。美しいこの土地の空気に自分も順応しているのだと確認したくて、私はことさらに駆け回った。小さな灌木の茂みをハードルの様に飛び越え、草の露を跳ね飛ばしながら駆け上がってくる私の足音に驚いた野うさぎが、目の前を飛び跳ねて逃げていった。

あ〜、苦し〜!!

斜面の開けた場所に足を止めるとコメカミが締め付けるように痛み、心臓が早鐘のように打っている。しばらくは苦しくて息もつけられないほどだ。このまま酸欠で倒れてしまうかと思った呼吸をどうにか整え、青空をバックに聳えている雪山を眺めた。

昨日は山の中腹くらいまでしか見ることができなかったが、この日の朝は頂上の先まで、岩肌の筋や氷河の裂け目の一つ一つがくっきりと見えるほど鮮明だった。山の窪みにハート型にたまっている氷河の厚みはそうとうな物だ。私は持ってきていた双眼鏡で薄いブルーに輝いている氷河を眺めながら、あそこに溜まっている氷河の雪は、何年前に積もったものなのだろうと考えていた。

雪山の絶景を楽しみ、朝の散歩を満喫してテントのあるキャンプ地の方へ戻ると、写真‘命’の男性陣が湿原の牧草地の中にカメラの三脚を立て、秒単位で変わって行

く空の状況に合わせてシャッターを切っているところだった。

昨日は一瞬の奇跡を期待して、忍耐強く雨の中を待ち続けるも不発に終わり、苦渋の涙を呑んでいたプロカメラマンはだしのKさんも、この朝の雪山には苦勞が報われたのではないだろうか。旅行の案内人と銘打って同行してはいたが、実は自分の撮影旅行をすっかり仕事にしてしまっていた感もある烏里氏も、夢中でシャッターを切っている様子だ。その横では先程小屋から手を振っていた少年も、いつの間にか小屋から降りてきて男性陣の仲間入りをし、一緒にカメラのファインダーを覗き込んだりしている。

私がカメラマンの群れに近づいていくと烏里氏が言った。

「朝食後にハイキングに行くから準備しといて下さいね」

そして少年を指差すと

「彼も行くよ。Kさんのポーターに雇われたからね」と付け加えた。

朝食後、ハイキングの準備を整え私はウキウキしていた。烏里氏の言うことには、この先にもっと美しい景色の見られる場所があるのだという。それに加えてすっかり気に入っていたやんちゃな13歳の少年が、私達のハイキングに同行する事になったのも嬉しかった。私達はそれぞれ小さなザックを背負っていたのだが、少年はKさんのカメラ機材やフィルムなどがぎっしり詰まった、大きくて重そうなザックを背負っている。

更に出発間際になって、この旅行の参加メンバーの中では最年長のTさんもポーターがいたほうが良いということになり、やはり洛絨牛場に遊びに来ていた少年と同じ村に住むチベット族の少女も急遽雇われ、ハイキングに参加することになった。

Tさんのポーターはチベット服に身を包んだ、切れ長の大きな目をした美少女だ。自分の同胞である美しい少女が仲間に加わって、少年も嬉しそうだった。

一行は湿原の端に沿うように伸びている道を、雪山の方向に向かって進んで行った。道は昨日の雨で酷くぬかるんでいて歩きにくかったが、次々と現れる美しい湿原の風景や、咲き乱れる可憐な高山植物に目を奪われて飽きることがない。

しばらく行ったところで林が途切れ、ポッカリと芝生の広場になった様な場所に出た。

うわぁ～!!!きれ～い!!

あたり一面、敷き詰めたような可憐な野草の花園だ。それぞれ思い思いの場所に腰掛け休憩した。私の少し先では咲き乱れる花園の真ん中にチベット族の少女が腰掛け、それに寄り添うように少年が半身を横たえ寝そべっている。顔を見合わせ何か話している花園の中のチベット少年と少女。少女の手には無造作に摘まれた花が数本揺れていた。

う、美しい～!!二人はまるで映画の中のワンシーンから抜け出してきた様だった。私は少年達のそばにいて話に加わりたいと思いながらも、あまりに美しいその光景に近寄ることもできず、離れた場所からうっとり見つめてしまった。彼らにとってはこれが日常の風景なのか。なんてロマンチックな～!思わず嫉妬を感じてしまう。

カメラが欲しい～!私は旅行などの際ほとんどカメラは持っていかない。どんなに綺麗な風景も私の写した写真では実際と違っていてガッカリする事が多かったし、旅の荷物はできるだけ減らしたい。カメラを持ち歩くのが面倒だったこともあり、美しい風景は自分の目で見ておけばそれでいいやと思っていたのだが、花園の二人があまりに素敵だったので、この旅行中の、この時だけはカメラが欲しいと思えてしまったのだ。

せめて誰か写真撮ってよ～!私がやきもきしていると、遅まきながら二人の様子に気づいた母が近寄っていき正面からカメラを向けた時には、少女ははにかんでそっぽを向いてしまい、少年はカメラを意識してポーズをつくり、後日出来上がってきた写真は、やはりあの時の素敵な風景とはちょっと違ってしまっていた。

私達が休憩した秘密の花園からほどなくして、湿原の端を縫うように続いていた道は突然途切れてしまった。目の前には洛絨牛場ルオロンユウチャンと同じような湿原がひろがっている。この湿原の向こう端は、この朝私が眺めていた雪山「ヤンマイヨン 亜丁三大神山」の一つである「ヤンマイヨン 央邁勇」の山裾だ。洛絨牛場から遠くに見えていた神山の岩肌をつたい流れ落ちてくる三筋の滝は、もう目の前にあった。

素晴らしい風景だ。しばし呆然と見とれた。

道が途切れてしまったので、ハイキングはここで終点なのかとと思っていると、烏里氏は湿原の中に降りて行く。よく見れば細々と板や木の枝などが渡してあり、その上を綱渡りのように伝って歩くようになっていたが、それは橋というにはあまりにも心もとない代物だ。もしバランスをくずして転んでしまえば、泥まみれになる覚悟をしなければならぬ。

慎重に歩くが私の靴はズブズブの泥に足をとられてドロドロだ。苦労しながら歩く私の脇をスイスイと歩

いていく烏里氏はとみれば、くるぶしのところまで泥水につかって平気そうにしている。「烏里さんの靴は水が染みないの～?」と私が問うと「私の靴は防水のトレッキングシューズだから、全然大丈夫だよ」との答えだ。

冒険やアウトドアは大好きだが、ほとんど経験も知識もない私は、長靴以外にそんな便利な靴があったのか～!とちょっと衝撃を受け、自分も今度そんな靴を購入しようとこの時ひそかに心に決めたのだった。

何とか全員が無事に湿原を渡り終えると対岸にある雑木林の山裾に着き、よく見ればそこが登山口となっている。

この時点で結構疲れていた一行は、まだ半分以上の行程があり、ここから先は登山なのだという烏里氏の言葉に、少なからずグッソリしていた。なんとか高度順応していたとはいえ、やはり酸素の薄い高山では下界よりも体力の消耗が激しいのだ。

「俺は無理だ。ここで昼寝しながら待ってるから気にしないで行ってきてくれ。」

最年長のTさんが言った。

私達はTさんとTさんのポータである少女を残して山に登り始めた。昨夜の雨でぬかるんだ登山道は登りにくく余計に足が重く感じられる。私は自分が完全に高度順応しているというポーズを作りたかったので、元気なふりをして登っていたが、やはり実はそうとう苦しかった。私よりもかなり年上の旅行メンバー達は尚更だった事だろう。日本人組の歩みの遅さに合わせているのが面倒になったのか、少年は一人で先に行ってしまったらしく、いつの間にか姿を消していた。

「ねえ～、こんな登山なんかして何があるのお～?」

ついに弱音を吐きそうになった私が声をあげた。

「なんでも頂上にすごく綺麗な湖があるんですって」
え!? すごく綺麗な湖～!? それは見たい!!

山の頂上にある綺麗な湖とはどんななんだろう。人一倍好奇心が旺盛な私は、登山の目的が出来た事で俄然元気が湧いてきた。やはり苦しい事をするには、それなりの目標があるのと無いのじゃ大違いなのである。

それまで歩いてきた雑木林がいつしか途切れ、先ほどは下から見上げていた滝がいつの間にか目の高さまで迫ってきていた。見上げればこの朝、洛絨牛場から双眼鏡で眺めていた氷河も、グンとその距離を縮めて頭上に迫りスゴイ迫力だ。

ヤッホー!!

気分の盛り上がってきた私は、亜丁の山々に向かって多少場違いな叫び声をあげた。

(次号に続く)